横溝正史と戦後啓蒙：『獄門島』試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五味渕, 典嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1308

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第41号　二〇一〇年三月

横溝正史と戦後啓蒙

――『獄門島』試論――

五味渕典嗣

1　はじめに――問題の所在

あまりに見え見えなので口にすることが躊躇されてきたのか、それとも空気のように自明な事柄だからあえて言及されなかったのかはよくわからないが、横溝正史が探偵として金田一耕助を登場させた作品のほとんどが、一般に《戦後》と呼ばれる時空を舞台としていたことは、改めて問われてよいことのように思う。

そもそも、シリーズ全七七作の執筆時期が敗戦から十数年間に集中するからでもあるのだが、年代が特定可能な作品で、物語現在が一九四五年から一九六〇年の間に収まらないのは、第一作の『本陣殺人事件』（『宝石』一九四六・四～九）と、一九六一年の事件を描いた『蝙蝠男』（『推理ストーリー』一九六四・五）、晩年の『病院坂の首縊りの家』（『野生時代』一九七五・一二～一九七七・一二）と『悪霊島』（『野生時代』一九七八・七～一九八〇・三）のみである。[1] ただし、『本陣殺人事件』は、戦時中に岡山に疎開していた探偵作家「私」が、一九三七年一一月に金田一の関与した事件の伝聞を再話する形式をとっていたことは周知の通りだし、『病院坂の首縊りの家』も、事件の発端は一九五三年の時点に置かれて

いた。藤本亮は、「昭和三〇年代」の金田一耕助の造形が、同時代の読者の生活実感から著しく乖離している様子に注意を促したが、そのことは、このシリーズがいかに《戦後》という時代背景と密接に結びついていたかを、逆説的に物語っているだろう。[2]

考えてみれば、金田一耕助は出発当初から、すぐれて《戦後》的な存在として設定されていた。シリーズ二作目の『獄門島』（『宝石』一九四七・一～一九四八・一〇）では、金田一を、戦場体験を持つ生存者（サバイバー）として紹介している。

> 金田一耕助。――もし諸君が『本陣殺人事件』を読んでいてくだされば、この男がどういう人物であるかご存じの筈である。
>
> 金田一耕助が岡山県の農村の、旧本陣一家で起ったあの不思議な殺人事件の謎を解いたのは、昭和十二年のことであり、当時かれは二十五六の青年だった。その後かれは何をしていたか。――何もしなかったのである。日本のほかの青年と同じように、かれもまた今度の戦争にかりたてられ、人生でいちばん大事な期間を、空白で過して来たのである。
>
> 最初の二年間かれは大陸にいた。それから南の島から島へと送られて、終戦のときにはニューギニヤのウエワクにいた。（第二章）

あまりにあからさまな否認なのでかえって当惑させられるが、金田一の物語は、中国との戦争が全面化して以後の八年間を「日本のほかの青年と同じように」「空白で過して来た」と意味づけるところから出発している。これは明らかに意図された設定であり、一連のシリーズが担った歴史性を考える上で重要である。そしてこの作が、狭義の探偵小説・ミステリー小説研究の枠にとどまらない、敗戦直後の言説の場を思考するきっかけとなる可能性を示唆している。

ところで、近年の文学・文化研究の中では、従来は（不当にも）周縁的なジャンルと見なされてきた探偵小説・推理小説作品を同時代の政治的・社会的な問題と節合させる、注目すべき仕事が多く登場している。[3] 戦前期の谷崎潤一郎や江戸川乱歩の作にしばしば描出される〈変態心理〉〈変態性欲〉の表象をめぐって精力的な調査と考察が展開されていることは周知の通りだし、松本清張や水上勉のいわゆる〈社会派推理〉作品が、敗戦から高度成長期を生き抜いた人々の、潜在的な「不安や後ろめたさ」「自己欺瞞」に物語という形を与えていた、という指摘もなされている。[4] 横溝正史にかんしては、谷口基が、戦時下の諸作を夏目漱石や菊池寛など「一般文壇」に対する批評的な応答として解釈できると示し、[5] 二松学舎大学が受け入れた横溝正史旧蔵資料からは、自筆の執筆・取材ノートの紹介が始まってもいる。[6] しかし、横溝の作品、ことに金田一シリーズの歴史性をめぐっては、『本陣殺人事件』を敗戦直後の焼跡に生きた都会人たちの私秘性と定住性に対する憧憬と郷愁とを刻んだ作と位置づけた小松史生子の議論を除いて、意外なほどに言及が少ない。[7]

そこで本稿は、金田一耕助の戦場からの〈帰還〉を描いた作である『獄門島』を取り上げ、この作が、敗戦直後の日本社会をどんな物語として構造化していたかを示したい。そして、その物語が、同時代の日本語の言説の場においてどのように位置づけられるかを考えたい。なお、上記の問題意識を踏まえ、本稿は『獄門島』の初出本文を採用する。[8]

2　戦争と移動——トポスとしての「獄門島」

アジア地域で初めての総力戦として戦われたアジア・太平洋戦争は、戦争に関与したり、戦場とされた地域の人々にとって、かつてない規模での〈移動〉として経験されたのではなかったか。応召・出征・転戦・占領・駐留、脱出・逃亡・離散・死別、連行・徴用・派遣、移民・植民、そして疎開と引き揚げ……。いずれも、好むと好まざるとにかかわらない、大がかりな空間の〈移動〉を伴う行為である。日本帝国に限っても、一九四五年段階で約七二〇万人が軍に所属し、約四

〇〇万人が軍需工場で働いていた。さらに、戦争末期の日本列島では、およそ一四〇〇万世帯のうち八〇〇～九〇〇万世帯が何らかのかたちで家族の離散を経験し、「敗戦時には八五〇万人に達したといわれる疎開者を加えれば、戦争末期に成員の欠けていない家族はないというほどであった」[9]。加えて、日本帝国の降伏と解体が、新たな移動の契機ともなった。かつての占領地や植民地からの復員者・引き揚げ者として、軍人・非戦闘員合計六〇〇万人超が列島を目指す〈移動〉を始め、一九四六年末時点で、うち四四〇万人が列島の土を踏みしめていた[10]。戦時下において列島各地への〈移動〉を強いられた人々を含め、それぞれの地域は、従来経験したことのないような多様性と差異に直面することになった。北河賢三の言を借りれば、「敗戦後の「民衆」は〝一つ〟ではなく分裂しており、「民衆意識」には大きな亀裂があった」のである[11]。

人間が動けば、さまざまな出会いとドラマが生まれよう。戦争はひとを家族や日常の社会から引き剥がし、引き剥がされた者同士を交錯させる。また、戦争は人々の絆や係累や生活の場を奪い、人間の心性や世界観を否応なしに変えていく。どうかして生き抜くために自分の思想や信条を抛擲せざるを得なかった者や、他人への気遣いを弊履のように捨ててしまった者も数多くいたはずだ。混乱の中で記録が失われ、ある個人の生きた痕跡が別の個人の記憶にしか残らないことも稀ではなかったろう。逆にそのことが、新たな人生への足がかりとなる例さえあったかも知れない。敗戦後の探偵・推理小説が、犯人の来歴に好んで戦争の爪痕を描き込んでいたのはそのためだが、『獄門島』の物語世界は、より直截に戦争と結びつけられている。

例えば、金田一耕助が瀬戸内海の孤島「獄門島」に赴くきっかけとなったのは、共にニューギニアの戦場を生き延びた本鬼頭家の継嗣・千万太と「戦友」になったからだった。『獄門島』の主な話柄となる見立て殺人のプログラムが起動したのは、もう一人の継嗣候補・一（ひとし）の生存という誤報が、「ごちそう」と「お礼」を目当てにした復員詐欺によってもたらされていたからだった。加えて、当時頻発していた復員軍人たちによる犯罪行為や、戦時中は島の守備兵だったという謎めいた美少年・鵜飼章三の存在が、読者をミスリードする思わせぶりな記号として散りばめられていた。だが、それだけ

ではない。重要なのは、都合四つの殺人事件の舞台とその出演者たちに、どんな言葉と表象が付与されていたか、ということである。

まず第一に、誰の目にも明らかだが、トポスとしての「獄門島」が「特種な島」として有徴化されていることを確認しておこう。古くは藤原純友以来の海賊の根拠地とされ、「旧幕時代」には「中国地方の某大名」によって流刑地とされたというこの島の住人たちは、周囲から「海賊の末よ、流人の子孫よ」と「擯斥」されてきた、と語られる。金田一のパトロン・久保銀造も、「獄門島」を「いやな島」「恐ろしい島」と紹介しているが、興味深いことに物語の語り手は、その風評を次のごとく敷衍する。「元来が島の住民は、きわめて排他心が強いうえに、環境に制約されるところも多いから、めったに他の島々と縁組みをしない」。よって、「獄門島の住人はことごとく海賊と流人の子孫」だ、と何のためらいもなく断定してしまうのだ。

小松史生子は、「横溝作品の語りの特徴は、純粋な三人称の語り手が見出しがたいという点にある」と言っている。[12] 確かに『獄門島』でも、まるで示し合わせたように、登場人物と語り手は、島の住人たちへの偏見に満ちた発言を繰り返している。島に駐在する清水巡査は、「この島の住人どもは、みんな常識では測り知れぬ奇妙なところ」があり、「本土の人々などの思いもよらぬような、変梃な考えを包んで」いる、と述べ立てる。金田一耕助はたびたび「獄門島の住人」たちは精神に変調を来していると頭を抱え、同じセリフは、当の島民たる了然や分鬼頭のお志保の口からも発せられている。しかも、そこに戦争が介在する。再び清水巡査のセリフを引けば、「あの戦争」によって「みんな大なり小なり気がちごうている」のである。すなわちこの作は、自らが語る連続殺人事件を、どうかして「特種な」時代に「特種な」場所で「特種な」人々が起こした出来事だと位置づけたいようなのだ。

しかも、念の入ったことに『獄門島』は、位相の異なる別の表象を上書きしていく。亡くなった本鬼頭家の当主・嘉右衛門は「太閤」と渾名されている。それに対抗する勢力・分鬼頭家の儀兵衛は「権現」と呼ばれている。三つの事件は、

嘉右衛門の死後、「本鬼頭」の大事を与る「三奉行」によるものだったが、死の床において彼らに殺害方法を伝授する嘉右衛門の様子は、あたかも「戦国の世の、武将の末路をきくような、あわれではかない物語」だったと評される。そして、金田一耕助がすべての謎を解き明かした後の章には、ダメを押すように「封建的な、あまりに封建的な」という題が付される。「獄門島」の空間的な特殊性を強調した語りは、それを時間の軸にも投射して、この島は二〇世紀に至ってなお、近代ならざる時を生きていたかのようなイメージを作り上げているわけだ。

とすれば、物語の最後で、本鬼頭家の血を引く唯一の若者となってしまった早苗が、一緒に島を出ようと誘う金田一に対して、次のように語っていたことは重要だ。

「いいえ、あたしは、やっぱりここにのこります。兄さんも、本家の兄さんも死んでしまって、これからさき、どんなむつかしいことになりますか、それはあたしもよく知っています。島も革命ならば日本も革命、網元だとて昔の甘い夢は見られますまい。でも、むつかしければむつかしいほど、あたしは踏みとどまらねばなりません。ちかごろ島にも復員で、おいおい若いひとがかえって来ます。そのなかからよいお婿さんをさがし出して、かなわぬまでも本鬼頭を守りそだてていきましょう。そうでもしなければ、お祖父さまの魂は、この家の棟をはなれることは出来ないでしょう。島で生まれたものは島で死ぬ。それがさだめられた掟なのです。でも……有難うございました。もうこれきりお眼にかかりません。」

早苗さんは顔をそむけて、よろめくように立ち去った。……（「大団円」）

「封建的な、あまりに封建的な」世界からの「革命」――。かつて杉山光信は、「戦後思想」とは「一九四五年八月十五日以前に支配していたものの否定の思想」であり、「この日以前に日本人を支配していたものがなにであったかと考える

かにより、否定の対象は変わって」来ると書いたが、[13] 敗戦直後の時期に、社会秩序・社会構造のレベルで「否定の対象」とされた習慣・風俗・心性・生活様式を名指す際に、しばしば〈封建的〉〈封建性〉という語が用いられていたことは周知の事実である。

『獄門島』の連載は、まさに〈封建的〉と見なされた制度の変革が急ピッチで進められていた時期と並行している。とりわけ農地改革が論じられる際には、当時の農村住民の意識の「遅れ」が問題として言語化され、「部落の力の強き者」に権力が偏在する、農村に固有とされた人間関係や「農村人の心理」が民主化を妨げているという議論が行われていた（前川富夫「農村の封建性」『朝日新聞』一九四七・四・二）。農村だけではなく、漁村の民主化にかんする議論も緒に就いていた。『獄門島』は、漁村における網元の立場を、農村における「大地主」以上の地位だと説いているが、まったく同じ言いまわしが『読売新聞』一九四七年二月一一日付け記事に登場している。政府が次期国会に漁業権割当ての見直しを行う法案を準備することになった背景について、その記事は、「地主的な存在の網元」が搾取をほしいままにし、「漁村の利益」を独占してきたからだと批判している。つまり、本鬼頭家のような巨大な網元の栄華は、もはや過去のものとなりつつあった、ということだ。『獄門島』が、こうした同時代の問題構成を参照していたことは間違いない。

また、早苗の発言が、どんな文脈の中で語られていたにも留意したい。別に彼女は、革命家を目指しているわけではない。彼女が「革命」として言明したのは、島に戻ってくる復員者から、自分で「婿」を選ぶことだった。言い換えれば、自分の結婚相手を自分で決めるということだった。この発言は、明らかに一九四七年五月に施行された新憲法の両性平等規定を意識したものである。あくまで〈家〉の存続が目指されていたとはいえ、一九四七年一二月の新民法制定直後の女性の発言として、相対的には清新さを感じさせるものだったろう。しかし、問題は、そのような選択・決断を、彼女が「革命」という言葉で表現したことの方にある。あるいは、彼女にそう表現させたことの方にある。

少し考えてみればよい。芭蕉と其角の句に擬えた、活人画ならぬ死人画を作るという嘉右衛門の遺言を唯々諾々と実践

した「殺人機械」たる三人――千光寺の住職である了然、村長の荒木真喜平、漢方医の村瀬幸庵――は、いずれも、島の旧支配層に属する者たちである。そして、事件が解き明かされた後、了然は一の訃報を聞いて頓死、村長は早々に村を脱出し、幸庵は発狂してしまっている。村を騒がせた復員軍人の海賊もどさくさまぎれに殺害されて、金田一耕助を含む他国者は島を出て行く。まるで母親の性的な乱倫さの報いを受けたかのように「不健全で病的」な「三輪の狂い咲き」と象られた月・雪・花の「ゴーゴンの三姉妹」も、いまやこの世の人ではない。

語り手と金田一とが代わる代わる「気がちがっている」と名指した人々によって起こされた犯罪が、結果として、この島にとっての〈近代〉の幕を開けていく。あたかも『獄門島』の事件は、島の忌むべき過去を清算してしまったかのようだ。つまり、ここでも革命は、自ら獲得されたものではない。特殊な島の特殊な人々が特殊な時代に演じた、いかにも凄惨で異様な事件と語られた「獄門島」での出来事は、時代遅れの封建遺制が半ば自ら壊れていく物語としても提示されているのだ。これはいったい、どういうことなのか。

3　防衛機制としての物語

戦争という〈移動〉の時代に、尋常ならざる封建遺制を残存させてきたこの島にも、ようやく近代化の波が訪れる――。『獄門島』は、探偵金田一耕助が最後に解き明かした事件の他に、もう一つの物語を埋め込んでいる。するとさしずめ金田一は〈近代〉の使者ということになるわけで、その彼が「アメリカ帰り」と設定されているのはいささか出来すぎている気がしないでもないが、それはともかくとしても、『獄門島』に埋め込まれた物語に、表象の凝縮・転移・局所化等、ある種の心理的な機制との類似を指摘することは十分に可能である。

ハワード・ヘイクラフトの古典的な書物によれば、「探偵小説は探偵が市民正義を回復する物語」である。[14] だが探偵は、

犯人を逮捕することも法による裁きを下すこともできないのだから、探偵物語には警察制度と司法制度の円滑な作動が不可欠の前提である。しかし、金田一の〈帰還〉が語られた時代は、そのいずれもが戦前・戦時からの連続性を問われ、システムとしての安定性を欠いていたはずである。また、作中で金田一や人物たちは、現場に取り残された死体の異様さに驚くが、必ずしもそれは「戦場の現代的な大量死の体験」が「もはや過去のものかもしれない尊厳ある、固有の人間の死を、フィクションとして復権させる」（笠井潔）[15] ためとは言いきれない。作中で殺害される三人の女性は「死なせたほうが本人たちのためにも慈悲、世間のためにもなろうと思った」と語られていて、彼女たちの死は、かけがえのない個別的な死として悼まれているわけではまったくない。それに、そもそも金田一は、戦場体験者だったはずである。作中でも彼は、「数年間の前線生活」の中で、「爆死」や「病死」など、「いやというほど、人間の死ぬところを見て来た」と紹介されてはいなかったか。ならば彼は戦場で、もっと悲惨で、酷たらしく、思わず眼を背けたくなるような死と幾度も出会っていたのではなかったか。そのことは、同時代にこの物語を手にした読者たちが、一番よく知っていたはずである。

すなわち、『獄門島』の物語は、変化という幻想を、あるいは安定した日常への復帰という願望を虚構において演出する装置としても機能している。言い換えれば、この物語は、読者たちがつい先日まで自明視していた認識や価値観を、特殊な場所の特殊な人々の問題として局所化し、過去の遺物として相対化するための装置である。先に鬼頭早苗の「島も革命なら日本も革命」という言葉を引いたが、考えてみればこの言表は相当に奇妙である。本来は〈日本も革命ならば島も革命〉とするべきなのだから。この論理的な転倒は、早苗の口を借りて語られた「獄門島」の「革命」が、先取られたフィクションでしかなかったことを象徴的に表している。

そして、このような幻想を下支えするのが、金田一の設定に刻まれた空白に他ならない。金田一は、「日本のほかの青年と同じように」「こんどの戦争にかりたてられ、人生でいちばん大事な期間を空白で過ごしてきた」。忌むべき過去からの脱却と切断という幻想は、戦時下の言動と行動にかかわる記憶を問わずにおくという暗黙の申し合わせの上に成立して

いる。だが、これは、どこかで見覚えのある構図ではないか。

『獄門島』が埋め込んでいる物語は、一般に〈戦後啓蒙〉と総称される言説の系と相似的である。そのことは、いくつかのレベルで指摘することが可能である。

まず、一九四七年の川島武宜が「結婚は昔からいまにいたるまで」「部落の内部でのみ行われ、他部落の者との結婚はまったく例外的」という離島の漁村を、「日本封建性のアジア的性質」を例証する重要な事例として紹介していたという事実がある（「日本封建性のアジア的性質――奴隷制の一形態としての養子――」『中央公論』一九四七・四）。川島は、自らが言及する漁村の社会関係を日本社会の封建的性格の中にある「アジア的性質」の「原型」と位置づけているのだが、ここでは、「部落全体が一つの血縁団体」であり、「親族的結合にたいする執着が強」いとする川島の漁村表象と、『獄門島』のそれとの近似ぶりを確認しておきたい。

こうした直接的な類似・参照関係だけではない。近しい過去としての戦時下の記憶を切断した上で、今後、日本社会にいまなお残存する〈封建性〉〈封建遺制〉の変革が行われていくだろう、という語りの構図に留意すべきである。そのことは、「現代日本の歴史的な課題が、今までの日本に支配的であった封建的な、またそれと結びついた帝国主義的な、政治的・経済的・文化的な勢力を一掃することにあるという点においては、わが国の進歩的な知識人の見解はまったく一致している」と語る、蔵原惟人のようなマルクス主義者だけの問題ではない（「文化革命と知識層の任務」『世界』一九四七・六）。例えば、「自由なる主体意識」の欠如と「上からの圧迫感」の下位者への移譲というあり方を「近代日本が封建社会から受継いだ最も大きな遺産」と意味づける丸山真男が、「八・一五の日」を「超国家主義の全体系の基盤たる国体がその絶対性を喪失し今や始めて自由な主体となった日本国民にその運命を委ねた日でもあった」（「超国家主義の論理と心理」『世界』一九四六・五）と書きつけたことに典型的に看取されるが、このような未来に向かうプロジェクトを語る言葉は、戦時の〈悪夢〉から解放され、すでに覚醒した・啓蒙された主体の像を言語的に析出してしまっている。ウェーバーを引

きつつ、日本社会に広汎に指摘できる「非合理的なマーギッシュな心理的束縛から民衆を解き放」ち、民衆の間に「近代的人間類型」を創造することこそ、「吾国の平和的再建」に不可欠と宣言する大塚久雄の見解も同様である（「魔術からの解放――近代的人間類型の創造――」『世界』一九四六・一二）。そして、とりわけ過去の「封建的な」因襲に囚われた場として、あるいは「我が国政治の専制的傾向」の「基盤」として、都市に対する地方が、具体的には農村・漁村が発見されていく（宇野弘蔵「我が国農村の封建性」『改造』一九四六・五）。論じた当人の問題意識は別としても、自らの住んだ「東京から一時間半、次でバス四十分、そこから徒歩十五分の位置にある」一つの集落を「気違い部落」と名指してしまう木田稔（きだ・みのる）の感覚にも、啓蒙の語りの構図は、確実に作用していたと言ってよい（「気違い部落周游紀行」『世界』一九四六・九～一〇）。

改めて言うまでもなかろうが、ここで語られた農村や漁村の「封建的」性格は、まさに〈創られた伝統〉でしかない。[16] ヴィクター・コシュマンは、敗戦直後に「近代的主体の構築」を喫緊のテーマと提唱した論者たちに、「自己決定を下しうる成熟した近代的諸個人と考えられる人々」と、「いまだなんらかの意味で非成熟であるために自ら話すことを許されず誰かが代わって話さねばならない人々との区別」が存在したと論じたが、[17] まさに、プロジェクトとしての〈戦後啓蒙〉は、不断に啓蒙されざる人々の表象を欲望し、そして、再生産していたのだった。すなわちそれは、『獄門島』を読む読者が、つい先日までの自分たちの似姿を、粗暴で野蛮なかつての「海賊と流人の子孫」たちの問題へと封じ込めたことと同断である。〈戦後啓蒙〉の語りに同調した読者も『獄門島』の読者も、テクストにおいて「封建的」と名指された事象を、決して自己自身の現在の問題と考えることはなかったはずである。

見られる通り『獄門島』は、〈戦後啓蒙〉が前提とする語りの構図を、きわめて忠実になぞってしまっている。そのことを、ストーリー・テラーとしての横溝正史の、時代に対する鋭敏な才覚の証しと取ることはもちろんできる。が、むしろわたしが重要と思うのは、『獄門島』を通して見えてくる、〈戦後啓蒙〉の語りのいかんともしがたい通俗性である。

〈戦後啓蒙〉の語りは、その枠組みに同調し加担する者たちに、自分たちは自覚的な・啓蒙された個人であるという幻想を与えてくれる。しかも、都市―地方／都市―農村・漁村という二項対立の中で語っていれば、戦争による〈移動〉が招来した途方もない亀裂と分断をカッコにくくり、日本という社会の揺るぎない一貫性・一体性を代補することも可能である。だから「封建性」からの脱却と〈近代〉の訪れを予告するプロジェクトとしての〈戦後啓蒙〉の語りは、同時に、社会的な危機管理の言説なのであって、その限りにおいて、〈世間一般の人びとに受け入れられやすい〉〈俗受けのする〉言説なのだった。これを通俗的と言わずに、何と言い表すべきなのか。『獄門島』の物語の構図が、それ自体として通俗的なのではない。『獄門島』が参照し包摂した同時代の問題構成こそが、通俗的な物語としてあった。

4　転位される敗北

ヴォルフガング・シベルブシュは、一九世紀後半から二〇世紀初頭の「再野蛮化」された「仮借ない無制限戦争」の敗者が自分たちの敗北をどのように受け止めたかについて、一八六五年のアメリカ南部連合国、一八七一年のフランス、一九一八年のドイツを例に、比較史的な考察を加えている。[18] シベルブシュは、「敗戦の経験は国ごとに違っている」が、「敗戦に対する反応には――心理的・文化的、あるいは政治的なものであれ――時代や国境を越えて繰り返し現れるいくつかのパターン、あるいは原型のようなもの」があると書き記す。その「パターン」「原型」に、どれほどの一般性があるかは別に議論を要するが、彼の着想は、敗北という現実を新たな始まり・再出発の契機として捉える発想自体が、ある種の忘却を伴っていることを教えてくれる。なぜならば、敗戦国の再生に貢献・寄与できると自認する存在は、自分（たち）は真の敗者ではないと考えているからだ。より精確には、自分（たち）は敗戦国の構成員であり、その限りで敗北をまぎれもない現実として受け入れねばならぬけれど、決して中心的な敗者ではない、と見なしているからだ。

すなわち敗者たちは、幾重にも表象の切断と転位を遂行するのである。そして、シベルブシュによれば、こうした切断と転位を合理化し・根拠づけていく際に、それぞれの歴史的・社会的・文化的コンテクストに即した神話＝物語が要請される。彼の問題提起は、一九四五年の日本帝国の敗北・解体の過程を考える上でも示唆的である。

日本語の言説の場で「敗北」がどう語られたかという問いは、主に〈戦争責任〉をめぐる議論の中で言及されてきた。例えば、吉田裕は、占領期の段階ですでに「民衆の戦争責任の問題や対アジア責任の問題」にかんする重要な論点が提示されていたものの、「一人一人の民衆が自己の戦争協力や戦争責任の問題をいかに総括するのか」という課題は、急激に変化する状況への適応が優先された結果、みごとに「迂回」されてしまった、と論じている。[19] また、吉見義明は、吉田の議論を受けながら、敗北という現実を転位する技法の一つであったところの「「だまされた」論」について、「だまされたということは同時に戦争に協力したという意味を含んでいた」が、この意識されざる〈気づき〉は、「民衆の戦争荷担の事実、理由、責任を問」う方向には深化しなかった、とまとめている。[20]

このような事態が、敗戦後の日本社会における侵略行為に対する責任意識や、植民地支配に関与した・その余沢に与っていたことに対する責任意識の欠如につながることは、すでに多くの論者が言及するところでもある。だが、ここで注意したいのは、〈戦争責任〉を問う構えは主体性の問題を持ち込むため、そのことを論じる主体の〈いま・ここ〉での思想的・政治的立場と未来に向かう投企のありようを問題化できる一方で、ともすれば、特定の時期・特定の対象の〈戦争責任・侵略責任〉の自覚の有無に論点が集約されてしまう傾きがあったように思える。結局のところ、誰が・誰に対する責任意識を有していたか（欠いていたか）という認定のみにとどまる議論も確かにあった。

とするならば、より同時代の言説の場に近づいて、「敗北」の受容プロセスを問う構えにも、相応の意義はあるはずだ。敗者たちの間で「敗北」の自覚は、どんな言葉で語られていたのか。「敗北」という現実の認識は、どのようにして迂回され、転位され、切断されていたのか。なぜ・どんな相手に・いかに敗れたのかという問題意識は、自分たちが「敗北」

を喫した対象を同定し、その対象との比較・考量を行って、何らかの説明を可能にする根拠をつかみ取ろうとするだろう。そのことは同時に、自らの〈いま・ここ〉の「敗北」に至る経緯を含め、一定の時間の幅を持った来歴の語りを編み上げることにもつながるだろう。さらに言えば、そのような微視的なアプローチで言説と向き合うことは、いまや二一世紀の日本国にとっての起源神話となった観すらあるジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』が、どのような記憶の選別と排除を行っていたか、批判的に問い返すことをも意味しよう。

敗戦後の日本語の言説の場で、敗戦という事実を了解し合理化するために、いかなる神話＝物語が発見され、呼び戻され、賦活されていたのか。そして、そのようなざわめき立つ物語の束たちと、文学言説はどこでどのように同調し、どこでどのように対抗していたのか。このことは、占領期の文学言説を考える際の重要な視点となるはずである。

［付記］資料の引用にあたっては、適宜通行の表記に改めている。また、引用文中の傍線・傍点は、すべて引用者によるものである。

注

（1）小嶋優子、別冊ダ・ヴィンチ編集部編『金田一耕助 The Complete』（メディアファクトリー、二〇〇四）

（2）藤本亮「戦後の社会意識の変容――横溝正史ブームを手がかりに――」（『社会学論叢』〔日本大学社会学会〕二〇〇一・三）

（3）探偵小説・推理小説批評と近現代日本語文学研究とのかかわりについては、吉田司雄「探偵小説という問題系――江戸川乱歩『幻影城』再読」（『探偵小説と日本近代』青弓社、二〇〇四）が詳しい。

（4）内田隆三「成長の斜面とミステリー」（『岩波講座近代日本の文化史10　問われる歴史と主体』岩波書店、二〇〇三）

（5）谷口基『戦前戦後異端文学論――奇想と反骨――』（新典社、二〇〇九）

（6）山口直孝「二松学舎大学所蔵横溝正史旧蔵資料紹介『悪霊島』取材ノート」（『横溝正史研究　創刊号』二〇〇九・四）

（7）小松史生子「戦後文学としての本格推理――横溝正史『本陣殺人事件』再考」（前掲『探偵小説と日本近代』所収）

(8) 『獄門島』の本文について。初出と現行形態（講談社新版全集を参照した）との間に、物語内容にかかわる大きな異同は存在しない。ただし、初出・新版全集は全二六章だが、角川文庫版は、全七章に区分されている。
(9) 大門正克「子どもたちの戦争、子どもたちの戦後」（『岩波講座　アジア・太平洋戦争6』岩波書店、二〇〇六）
(10) 加納実紀代「〈復員兵〉と〈未亡人〉のいる風景」（『戦後日本スタディーズ①　「40・50年代」』紀伊國屋書店、二〇〇九）
(11) 北河賢三『戦後の出発　文化運動・青年団・戦争未亡人』（青木書店、二〇〇〇）
(12) 小松史生子「金田一耕助のパトロン　「悪魔が来りて笛を吹く」を中心に」（前掲『横溝正史研究　創刊号』所収）
(13) 杉山光信『戦後日本の〈市民社会〉』（みすず書房、二〇〇一）
(14) ハワード・ヘイクラフト（林峻一郎訳）『娯楽としての殺人　探偵小説・成長とその時代』（国書刊行会、一九九二）
(15) 笠井潔『模倣における逸脱　現代探偵小説論』（彩流社、一九九六）
(16) 桜井哲夫は、杉浦明平のルポルタージュを引きながら「戦後の農村地域の風土は、けっして不変の伝統だとか、封建遺制などではなく、戦時・戦後の諸施策の結果「食糧管理という名目で国家統制のもとに置かれ」たことで「密室化」した農村で生じた変化であり、「まさに近代化のなかでしかあらわれようもなかった社会現象であった」と指摘している（『可能性としての「戦後」』講談社、一九九四）。
(17) ヴィクター・コシュマン（葛西弘隆訳）「民主主義革命と主体性――戦後主体性論争を中心として――」（『思想』一九九六・一二）
(18) ヴォルフガング・シベルブシュ（福本・高本・白木訳）『敗北の文化――敗戦トラウマ・回復・再生』（法政大学出版局、二〇〇七）
(19) 吉田裕「占領期における戦争責任論」（『一橋論叢』一九九一・二）
(20) 吉見義明「占領期日本の民衆意識――戦争責任論をめぐって」（『思想』一九九二・一）